



2003年3月1日

目次

「死生学」を構想し、構築する

拠点リーダー

島園 進

人文学の未来と死生学

人文社会系研究科長・文学部長

佐藤 慎一

「死生学」と「応用倫理」

「応用倫理」WG座長

竹内整一

部会案内

第一部会 死生学の実践哲学的検討

熊野純彦

第二部会 生と死の形象と死生観

小佐野重利

第三部会 死生観をめぐる文明と価値観

下田正弘

第四部会 生命活動の発現としての人間観の検討

横澤一彦

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/shiseigaku>

「死生学」を構想し、構築する

拠点リーダー 島 園 進

21世紀COEプログラム「生命の文化・価値をめぐる「死生学」の構築」は、現代の知の布置の中でますます重い位置を占めるようになってきている「いのち」や「死」をめぐる諸問題について、ある広がりや深みをもった総合的な学知を構想し構築しようとするものである。

「死生観」という日本語は一定の歴史をもっており、現代日本人の日常生活にある程度、浸透してきている。もっと長い歴史をもつのは、仏教に由来する「生死(しょうじ)」だが、「生死観」ではなく「死生観」の方が広く用いられている経緯はなお調べてみる必要がある。「死生学」の方はもっと新しい用語だが、これは英語の thanatology に対応する日本語として用いられることが多かった。だが、この21世紀COEプログラム「死生学の構築」は、「死についての学」を指す thanatology より広い範囲をカバーする学構築を目指している。Death-and-Life Studies という英語を訳語にあてている所以である。

これまで「死生学」が掲げられる時、医療やケアの現場が出発点となることが多かった。死に行く人の看取りや親しい人を喪った人のケアは広い意味での死生学にとっても重要な課題である。だが、新しい死生学の企てにとって臨床的、現場学的な関心は他の意味でも大きな要素となる。現在、生命倫理学とよばれているものを見直し、基礎を問い直すことも死生学の構想の一部である。功利主義的な傾向が強い、英語圏を中心とする生命倫理学にかわり、「いのち」と「死」をもっと深く問いながら、生命科学や医療技術の急速な発展が引き起こす諸問題に依拠していこうとする。したがってこの企ては応用倫理の深化という課題に答えようとするものでもある。

このように現代の切迫した諸問題に回答しようという構えをもつが、死生学はまた、文明や宗教についての奥深い知の継承、発展を目指すものでもある。そもそも「いのち」や「死」をどうとらえ、「いのち」や「死」とどう向き合うか。その姿勢は諸文化、諸文明の基底部を形づくる。宗教・芸術・文学はいつも「いのち」や「死」を問い続け、描き続けてきたとも言える。生命観や霊魂観、また葬送や追悼の様式は、その文化を生きる人々の情緒や感情の、ひいては思考パターンの枠組みを形づくっている。私たちは死者をどのように遇しているのか、死者から贈られてくるものをどのように受けとめようとするのか。未来の人類への責任に思いをめぐらすことは、死者との共同性について省みることとも切り離せないのではなからうか。

地球上のさまざまな場所で、西洋の文化を背景とした近代的な学知の狭さが嘆かれ、新たな知のあり方が模索される現在、このプログラムが構想する死生学は文明間、文化間の交流や対話の新たなあり方を展望しようとする。また、専門的な学知の間の壁を越え、偏狭な知を越えていこうとする。「いのち」や「からだ」や「こころ」が顔を出す場では、自然科学的な探求方法がものを言うとともに、人文学や社会科学の知もさまざまな応答を志す。理科と文科のギャップは医療やケアの現場で緊急の問題となるだけでなく、現代人の生活のさまざまな領域で難題を課してもいる。死生学は専門化し、特殊領域化する学知の分断を越えることも目指している。

限られた人員で、わずか5年の間に新しい学が「構築」できるなどと楽観しているわけではない。「死生学」の「構想」は大きなものである。だが、学を「構築」する作業は辛抱強く緻密なものではなければならない。これまでのディシプリンの枠を崩そうというのでもない。個々のディシプリンがその伝統に根ざしつつ、「死生学」の方向へ新たな試みに踏み出していく、その力を結集したい。それが確かに堅固な学形をとるものになるかどうか、必ずしも予測できるわけではない。だが、有望な研究領域群が頭をもたげつつあり、それらを括りながらあるまとまりを展望する語として「死生学」は確かに有効である。人文学の幅広い諸力を結集し、世界的な知的発信の拠点として名乗りを上げるにふさわしい呼称である。



人文学の未来と死生学

人文社会系研究科長・文学部長 佐藤 慎一

大学は今や大きく揺れているという実感を、濃淡の差こそあれ、大部分の大学教員が共有しているはずだ。このような大揺れはめったにあるものではなく、戦後の歴史の中で見れば、新制大学が発足した昭和20年代の激動と、大学紛争に見舞われた昭和40年代の激動に続く、第3の激動期というべきでありましょう。私は大学紛争の時代に学生生活を送り、いま文学部と人文社会系研究科の舵取りの責任を負う立場に立たされていますが、直接に経験した2つの激動期の性質は、大きく異なっているように思われます。

昭和40年代の大学紛争は、大学にとって恵まれた環境のもとで起こったものでした。経済的には高度経済成長の真っ只中で、大学進学希望者の数も右肩上がりが増え続けており、そのような条件に支えられて大学の数も規模もひたすら膨張を続け、格別の努力をしなくても学生が集まる環境の中で、大学は自己改革を怠ってしまったようです。

いま大学に吹く風は、完全な逆風です。経済的には長期のデフレが続き、大学進学希望者の数は急速に減少しつつあります。ごく近い将来に、倒産する大学も現われるでしょう。国立大学は、法人化という、単なる制度改革ではなく、設置形態そのものの変更を余儀なくされていますが、法人化の中身はいまだ不透明です。10年後の東京大学文学部がどのようになっているのか、学部長といえども予測が付きません。

こうした先行き不透明な時代をどう乗り切るかというのは、きわめて難しい問題ですが、不確実な予測をもとにジタバタしても仕方ないというのが、目下の私の考えです。100年の単位をものごとを考え10年の単位で仕事をするというのが人文系の研究者の基本姿勢であり、そうした人文系研究者の長期的視野で捉えれば、私たちの周囲の激動と呼ばれるものも、実は比較的些細な変化に過ぎません。はるかに大きな激動を越えて、数千年にわたって継承されてきたのが人文知であり、私たちは右往左往することなく、人文学の価値を信じて、学問にいそむべきでありましょう。

とはいえ、いかに人文学が時代を越えた価値を有するとしても、単なる伝統の墨守にとどまれば、やがて人文学が衰退することは確実です。国立大学法人化などは人類の歴史の中では些細な問題ですが、他方で、遺伝子工学や臓器移植に代表される科学技術の急速な発展によって、いま私たちが人類史上未曾有の諸問題に直面していることは否定しようのない事実です。それらはいずれも、「生」と「死」に象徴される人間存在の根本に関わる問題ですが、科学技術の発展の中からおのずと解答が見つかる類の問題ではなく、また過去の偉大な思想家の言説の中から容易に解答を引き出せる類の問題でもありません。人間存在の根本に関わる思索を煮詰めるのが人文学の役割であるとしたら、人文系の研究者は、こうした諸問題を、人文学の存在意義に関わる重大な挑戦と受けとめるべきでありましょう。そして、挑戦に応じて試行錯誤する中で、人文学の新たな発展があるのだと思います。

こうした考えに基づき、私たちは平成14年度から「応用倫理教育プログラム」を開始し、その成果を踏まえて、21世紀COEプログラムに「生命の文化・価値をめぐる『死生学』の構築」をもって応募しました。その意味で、この計画は、東京大学文学部・人文社会系研究科の将来にとっても、そして人文学の未来にとっても、戦略的重要性を持っています。人文学は「死」の問題を考え抜きますが、人文学そのものには「死」はあり得ないというのが、第3の激動期の舵取りをする私の基本的立場です。

「死生学」と「応用倫理」

「応用倫理」WG座長 竹内 整一

今年度より新設された「応用倫理教育プログラム」は、現代技術・現代社会の高度の発展により、これまでにはなかった新しい問題群・学問域として登場してきた「応用倫理」問題を研究・教育するための特別プログラムです。このたび発足した21世紀COE「死生学の構築」プロジェクトは、同プログラムともとてもかなりの部分でその対象・関心領域を共有しておりますので、今後とも、両者は人的・組織的にお互いに連携・協力しあいながら進めて行くことにいたしました。この一文は、そのことを確認すべく「応用倫理」WG座長としての寄稿を求められたものです。（実はその後私自身も、「死生学」プロジェクトのサブリーダーとしてその一員に加わることになりましたが、この文章は前者としての立場のものです）

「応用倫理」は、あれこれ焦眉の危機的な課題に応えられるよう社会的に強く要請され、この四半世紀、日本をはじめ世界各国で精力的に展開されてきており、かなりの成果・実績を収めてきております。しかしとはいえ、いまだ確固とした学問方法として定着していません。なにぶん、例えば臓器移植や遺伝子操作、体外受精、クローン、等々といった技術がもたらす問題は、（わが国の応用倫理学の先駆者の一人、加藤尚武さんの言葉をかりれば）「倫理や哲学の古典をいくら読んででも前例がない。定説がない。過去の言説や伝統にいくら問いかけても、答えがあるはずがない。歌舞伎の台詞を使えば「お釈迦さまでもご存じない」」（『見えてきた近未来／哲学』ナカニシヤ出版）といったような問題だらけだからです。そこでは、最先端の自然科学の知と人文・社会科学の知とが、これまでにない新たなかたちで統合・融合されることが求められています。

そのことを確認したうえでのことですが、かといって、その最先端の現代的課題は、決して“現代”のみから解けるわけではないこともまた言わずもがなの事実です。先日行われた「応用倫理研究会」の演習で講師の小松美彦さんは、「「生命・倫理・学」の陥穽と限界」というテーマで、最近の「応用（生命）倫理学」が基本的に条件整備や交通整理に終始しており、それがたんなる法律づくり・科学的なリスクチェックと同義語化してきていることを批判的に指摘しておられました。問いが目前の“現代”にのみ限定されすぎたところで、これまでの文化・文明の膨大な蓄積が無視されてきていることへの警鐘としての発言でした。問題はつまり、とりわけ人文・社会科学にいえば、それらの問いのすべてが結局は、「いのちとは何か」「尊さとは何か」「価値とは何か」、そして「人間とは何か」といった問いに帰着せざるをえないということです。要は、いかにそれらを自然科学の提出する最先端の知と十分かみ合う（＝統合・融合する）かたちで展開できるか否かということだろうと思います。

現代技術・現代社会の高度の発展により見えにくくなってきた、「死」と「生」のあらたな枠組みを問う、この「死生学の構築」（正式には、「生命の文化・価値をめぐる「死生学」の構築」）もまた、基本的にはまったく同様の学的要請を受けていることはいうまでもありません。「死生学の構築」プロジェクトと「応用倫理教育プログラム」とが連携・協力して営まれるべきゆえんです。具体的な計画としては、カリキュラム編成での連携や研究会の共同開催などの日常的な積み重ねをはじめ、この6月には少しまとめたかたちでの「死生学と応用倫理」という共催シンポジウムを企画しております。第1部「いのちの誕生と死生観」（6月7日）、第2部「いのちの終わりと死生観」（21日）の2部構成を予定しております。詳細は、次号でお知らせいたします。

第一部会 死生学の実践哲学的検討

熊野純彦

人間は生まれ、時とともに老い、やがて病をえて、死んでゆく。古来「四苦」とよばれる、個体としての人間のありようは、およそ人間的な生にあって動かしがたい条件をかたちづけている。死生学はこの間の消息にふかく根ざした問題群にかかわり、そのかぎり、古来の、しかも同時に現代的な問題状況とふかいかかわりを有している。

死生学とは人間の生と死をめぐる省察であるから、「生老病死」をめぐる考察は、当然のことながらその基本的な課題をかたちづくるものにほかならない。「四苦」はしかも、この世界の基本的な謎であるから、それをめぐる思考はすぐれて哲学的／倫理的な思考ともなるはずである。問題を複雑にしているのは、現在、すくなくともこの社会では、その「四苦」が通常はすべて「医療空間」の内部で生起することがらと連動している、ということである。医療空間は、それゆえ、すぐれて現代的な技術の先端と、古来かわらない、生の条件とが会う場となるわけである。

医療空間がそれを象徴している今日的な生のありようとは、それではどのようなものなのだろうか。当面の文脈でいえば、その指標は、誕生と死亡という人間的生の発端と終局とが、通常の社会的空間の外部へと隔離され、不可視のものへと変容してゆくことにもとめられよう。ひとが生まれて死んでゆくこと自体が、いわば「市民社会」そのものにとって外部化される。漂白され、管理された生にも、その外部、具体的な外部が、まぎれもなく存在する。ひとが食べるためには、どこかで生命が不断に断ち切れ（牛や豚が屠られ）ていなければならない。ひとはなお生まれ、ひとはいつか死をむかえる。そのときがいつであるのか、その死がどのようなものであるのかは、原理的に測りがたい。

現代において哲学的／倫理的言説をなおも紡ぎだそうとするばあい、その言説はたんに古来の人間的生存の諸条件にかかわるだけでなく、なにほどか、生の風景への科学技術そのものの浸透を措いては成立しがたい。四苦が生の不変の条件であるとすれば、科学技術はすぐれて今日的な生の制約である。医療空間はかくて、人間の生死、科学技術、哲学的／倫理的思考の三者が交錯しうる現場となるといってよい。死生学への関与は、現代の倫理的／哲学的思考にとって不可避的なのである。

今日いわれる「応用倫理」は、いまだそうした思考たりえてはいないがたい。なぜであるうか。ここでは論証に必要な手づきをはぶいてしまえば、たとえば生命倫理なるものがいまだ十分に哲学的な言説ではないからであるとおもわれる。生命倫理をめぐる議論のかなりの部分は、哲学的には疑問の余地の多い、つまりまさに哲学的に問いかえされるべき伝統的な枠組みを、吟味もくわえず前提しつづけている。緊急の課題をまえに、「哲学的」な議論の時間はない、いまどのように発言するかが問題なのである、という反論は十分にありえよう。ただし、かりにそうであるならば、それは「倫理学」ではありえない。倫理学は、「有用性」いがないの価値を知っているからである。また、「哲学」的言説でもありえない。哲学はやはり、「あたりまえ」とされることながらこそ問いたたすものであるとおもわれるからである。

本研究プロジェクトに参加する第一部会は、おおよそ以上のような問題関心にもとづいて、あらたに構築されるべき死生学にたいして、原理的／哲学的な基盤を与えることを目標とする。それは、アメリカ型のバイオ・エシックスの受容を経て、近年ようやく独自の動向を示しはじめた独仏型の生命倫理学にも学びながら、すぐれてこの国の歴史と現状をふまえた、いわば日本型死生学を模索するところみの一部ともなるはずである。

第二部会 生と死の形象と死生観

小佐野重利

人類の形象文化を振り返ると、古くから死と死後の世界に関わるものがいかに多いかに驚くことであろう。人は死の問題には無関心ではられない。死すべき定めであるゆえに、不死をえたい、あるいは一瞬なりとも死後の世界を垣間見たいと願う。『古事記』の語る、亡くなったイザナミを呼び戻そうとイザナキが訪れた挙げ句に逃げ帰った黄泉の国の話、『神曲』中のダンテによる地獄、煉獄、天国巡りの旅など、恐らく人の心に宿るそうした願望の表徴であろう。それが造形化されると、《地獄極楽図屏風》(金戒光明寺蔵)やサンドロ・ボッティチェッリによる《ダンテの『神曲』挿絵》といった名品となる。不可避な死そのものへの恐怖、あるいは未知なる彼岸への不安が、こうして葬礼美術、墳墓とその副葬品、記念碑、遺影といった豊かな形象文化を不断に生みだしてきたといってもよい。

死は生理学上の問題であるばかりでなく、いなそれにもまして文化的な問題であり、しかも、時代や地域によって文化的な関心の在り方に大きな相違がある。美術史、考古学および文化資源学は、墳墓の装飾や副葬品、宗教美術、礼拝像あるいは記念肖像などに関する個別研究を累々と築き上げてきた。本学総合研究博物館開催の『死後の礼節 古代地中海圏の葬祭文化(紀元前7世紀 紀元前3世紀)展(2002年)、同博物館開催『博士の肖像』展(1998年)、国立西洋美術館開催の『死の舞踏 中世末から現代まで』(2000年)などがその成果の卑近な例である。とはいえ、「生と死」の織りなす歴史的、文化的な観点から、生と死をめぐる形象の価値が総合的に研究されることは稀であった。

この部会においては、特に死をめぐる形象に焦点を当てながら、死が美術、墓碑および記念碑などとして、造形的にどのように表現され、弔辞、報道あるいは伝記として言葉でどのように語られてきたか、さらに、社会からどのように扱われてきたかについて、その歴史と現状を研究する。死は、本質的には「個人のもの/こと」であるにもかかわらず、社会(国家、職場)家族、報道メディアなどの他者が深く関与し、さまざまな意味を付与される。そのため、個人的な生から疎外された無惨な死もありうる。このような生と死をめぐる社会性を明らかにして、生の中に死を意味づける。

現在、国立広島原爆戦没者追悼平和記念館の開館により、原爆死没者の名前と遺影の登録を遺族に募集するとか、戦没者の追悼・平和記念のための記念碑等施設の建設計画が日本政府によって検討されている。国家と死者の関係に関するこうした今日の問題についても、またエドヴァルト・ムンクの《病室での死》(1893年頃)に予見されているような、安楽死や家での臨終か病院での臨終かといった医療と死の問題についても、社会的な関心が高まるなか、形象を軸に歴史・文化的な考察を行う。

医療とペストが歴史的に深く関連してきた西洋には「死の舞踏学会」なる人文系、社会系、医学系研究者の参加する研究学会がある。そのモデルに倣いつつ、ここでは、生と死が織りなした形象文化のモノ資料の収集とその通時的な検討、そしてその成果の公開展示を通じて、死生をめぐる現代社会の問題と課題を明らかにし、全体の研究課題である学際的、総合的「死生学の構築」の一助になることを目指したい。

さしあたり、2003年3月21日ウフィツィ美術館内図書館で開催する学会「洋の東西の美術と思想にみられる死後の世界観」を成功させたいものである。

第三部会 死生観をめぐる文明と価値観

下田 正弘

誕生から死に至るまで、人間の生命活動は、ほとんどの場合、生の自然のままに表れることはなく、文化的諸活動の一環として、何らかの価値を帯びたものとして表現される。日常を生きる人間にとっての生と死とは、事実上、文化のフィルターを通した、価値としての生と死にほかならない。種として誕生した生命が、種に固有の生と死を抱えるように、人間は受け取った価値観に象られた、固有の生と死を経験する。異種の生命間には、捕食・被食、あるいは寄生・共生の関係が成り立つように、異なった価値観の間には、抗争・共存、分離・統合の力が働く。そして何より生命は、この異種間に働くダイナミズムを通して、生命全体の持続・発展を図るように、人間はさまざまに異なった価値観のせめぎ合いの歴史を通し、生と死という根源的問題に向かう価値観を構築していく。死生観とは、人間としての固有の生と死の意味を理解するための、究極的な価値観にほかならない。

従来、生命をめぐる倫理的・価値的諸問題は、主にアメリカを発信地とするバイオ・エシックスの領域で研究されてきた。しかし今日的な課題に光を当てようとするバイオ・エシックスは、一方では原理的・哲学的問題をめぐる研究に疎く、他方では生命をめぐるさまざまな文化・価値観の差異に対して鋭敏さを欠き、総じて、この両者に対する歴史的な視点を欠落させてきた。人類の歴史を通して、諸文明の中でいかに異なった死生観が誕生し、持続し、変化し、共存し、抗争し、統合され、分離して行ったか、この問題を全体として明らかにする試みは、特定の関心事を際だせようとするのではなく、人間にとっての生と死の課題全体を浮かび上がらせ、現在を関心の中心とするバイオ・エシックスにとって、適切なコンテキストを提供しようとするものである。

こうした意識に立ち、第三部会では、死生観をめぐる、諸文明の宗教的基盤とその価値観に関し、従来切り離されがちであった教義的側面と実生活の側面を統合して理解する枠組みを構築し、加えて世界の研究者との領域横断的なネットワーク形成を企図する。具体的には以下4点を柱とする。

- (1) 諸文明を地域、あるいは宗教単位の文化に分け、文化ごとに世界の代表的な研究者を招聘し、講義・演習・共同研究・シンポジウムを実施する。
- (2) キリスト教、仏教、儒教、道教、神道、ユダヤ教、イスラム、各地の民俗宗教について、それぞれの死生観を問い、聖典解釈や儀礼的实践の伝統に即して、その歴史的変遷を研究する。
- (3) 各文明の伝承形態や地域社会での実態を理解するために調査や見学を実施し、宗教協力や宗教間の対話の現場への、臨床宗教学的アプローチをなす。
- (4) 日本文化における独自の死生観の歴史についての究明を進める。

これらの作業は、宗教学、インド哲学仏教学、日本文学の若手研究者、大学院生を積極的に参加させて実施し、次代を荷う若手研究者育成の一助とする。全体の成果を、世界宗教学宗教史学会議(2005年3月に開催予定)にあわせ、世界の宗教研究者・研究機関とのネットワークをより確かにものするとともに、プロジェクトを発展・継続させるための基盤としたい。

第四部会 生命活動の発現としての人間観の検討

横澤 一彦

生と死は、それぞれ対極に存在するものであると同時に、相互にその存在を依存している。「死」というものを位置付けるには、「生」の位置付けや意味を考える必要がある。万物の霊長たる人の「生」の突出した特徴は、言語活動・思考・学習・意識その他の高度な精神活動を営むことができ、それ故高度な文明社会を発展させてきたところにある。この高度な精神活動は、複雑かつ精緻に張り巡らされた神経細胞のネットワークによって実現されている。これらのネットワークがどのように活動して情報処理を行っているかを研究することによって、高度な精神活動のメカニズムに迫ることができると考えられ、このような研究が人の「生」とはなにかについて考える際のフレームワークを提供する。このような観点から、第4部会では、先端的技術を駆使して、生命活動の発現としての神経活動や脳活動を明確に記述し、認知、記憶、言語、概念などの行動レベルでの理解を深めることによって、人間の肉体的・精神的活動としての個体における生を検討することを目指している。

上述のような行動レベルは、意識と密接につながっており、心理学的研究を通じ人の意識が探求されてきた。今後も、実験データを蓄積し、意識とは何かについて考え、死生観をより豊かな視点でとらえるためのきっかけや考える材料を生み出さなければならない。また、人間観の形成に影響する思考を対象として、そこに文化差が存在するのかどうかを調べる。人間の性格をどのように認識するかは、ときとして、生死の問題と深く関わってくる。強制力が強い状況に置かれ、大多数の人が特定の行動をとらざるをえなくなるという場合でも、ある人物がその状況でその特定の行動をとったことを知ったとき、多くの人は状況を無視してしまうという。このような対応バイアスがはたらくと、個人、あるいは、国民、民族といった集団について、誇張された、あるいは実在しない「性格」を認識する結果になる。それはさらに、「人間」というものについて、歪んだ認識を形成することにつながり、ときとして、生死に関連する人間の判断に影響を与えることにもなる。

生のとらえ方は言語現象のさまざまな面にも影響している。例えば、表現される対象が生命を持つものかどうか、特に人間かどうかは、語形や構文などの選択に少なからぬ影響を与える。また、自然現象や無生物が生命体のメタファーを用いて表現されることも多い。しかし言語/方言への生命の反映は多様であり、それぞれの文化が異なるやり方で生命活動を概念化し慣習化している。そこで、できる限り多くの異なる言語/方言を調査し、生命活動の反映を総合的に明らかにする必要がある。それぞれの文化に固有の人間観を理解する手がかりが得られることが期待でき、新たな生命観の創成に寄与することを目指す。

さらに、行動科学的な生命活動の理解と医学的な生命活動の理解との関連を深く明らかにすることも第4部会のテーマである。医学や生理学など自然科学系で扱う「生命」に関わる問題と、人文学諸学が扱う問題レベルとはこれまで大きな乖離があり、その乖離を埋める役割をも積極的に果たすために、学際的な連携を重視したい。先端的研究の多くがそうであるように、純粹に技術的な可能性そのものを追求する自然科学的欲求に対して、人文学諸学は様々な分野の歴史的背景に従って積極的に発言する必要があるだろう。こうした観点のもと、とりわけ医学系の研究者との共同作業に積極的に立ち向かいたい。学際的連携を大胆に進めることで、「生命」に関する現代の価値観に目を注ぎたいと思っている。

事業推進担当者

(拠点リーダー)

島園 進 <宗教学>

(第一部会：死生学の実践哲学的再検討)

竹内 整一 <倫理学>

熊野 純彦 <倫理学>

松永 澄夫 <哲学>

関根 清三 <倫理学>

一ノ瀬 正樹 <哲学>

(第二部会：生と死の形象と死生観)

小佐野 重利 <美術史>

木下 直之 <文化資源学>

後藤 直 <考古学>

(第三部会：死生観をめぐる文明と価値観)

下田 正弘 <インド哲学>

多田 一臣 <国文学>

市川 裕 <宗教学>

池澤 優 <宗教学>

(第四部会：生命活動の発現としての人間観の検討)

横澤 一彦 <心理学>

立花 政夫 <心理学>

林 徹 <言語学>

赤林 朗 <医療倫理学>

杉下 守弘 <神経科学>

今後の予定

国際シンポジウム

「洋の東西の美術と思想にみられる死後の世界観」

(Visioni dell'Aldilà in Oriente e Occidente: arte e pensiero)

2003年3月21日

フィレンツェ ウフィッツィ美術館 (Firenze, Loggiato degli Uffizi, Biblioteca degli Uffizi)

シンポジウム

「死生学と応用倫理」

第一部「いのちの始まりと死生観」

(Beginning of Life and the View of Death and Life)

2003年6月6、7日

東京大学文学部

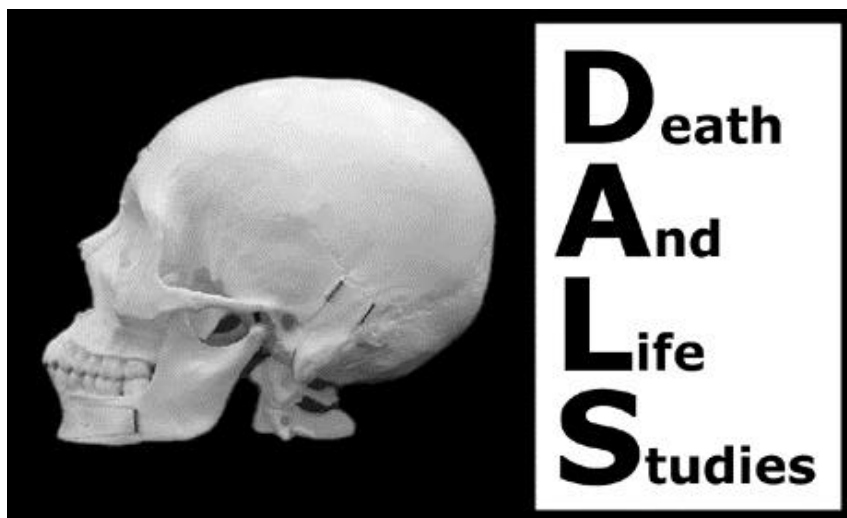
第二部「いのちの終わりと死生観」

(End of Life and the View of Death and Life)

2003年6月21日

東京大学文学部

詳しくは、ホームページ (<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/shiseigaku>) でご確認下さい。



「DAL S ニューズレター」
第 1 号

平成 1 5 年 3 月 1 日発行

東京大学大学院人文社会系研究科

2 1 世紀 C O E “ 生命の文化価値をめぐる「死生学」の構築 ”

責任者 島 蘭 進

TEL & FAX 03-5841-3736